

飛鳥資料館のみどころ (4)

—春期特別展「飛鳥の湯屋」—

飛鳥資料館では、毎年春と秋の2回、特別展示をおこなっています。今回の春期特別展は「飛鳥の湯屋」と題して、前号でも紹介した川原寺鉄釜铸造遺構復原模型などを展示して4月9日(金)から5月23日(日)の期間(会期中無休)で開催します。

昨年度、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が川原寺の北方でおこなった調査で、川原寺北辺を区画する堀や丘陵の東側を利用して築かれた瓦窯などの工房群が発見されました。中でも注目されたのが鉄釜の铸造施設です。直径2.8mほどの穴の中に、直径90cmほどの鉄釜の鑄型が設置されていました。また、鑄型に鉄を流し込んだ溶解炉の破片もたくさん見つかっています。

さらに今回の調査では川原寺の北限を画す掘立柱堀が検出されたことで、川原寺の寺域が南北三町(約330m)と判明するとともに、今回発見された工房群が境内に位置することもあきらかとなりました。寺院の境内に設置された工房の様子がうかがえる例として大変貴重といえます。

今回の展示では、この鑄型でつくられた鉄釜と川原寺の湯屋との関係を想定し、古代寺院の湯屋をテーマに展示を試みました。まず、鑄型から想定される鉄釜がどんなものか理解していただくために、大阪枚方市東楠葉遺跡出土品などの現存する鉄釜を展

示します。また鑄型から想定される鑄造方法を大阪府美原町余部遺跡出土品によって復原的に展示します。

鉄釜は湯釜等に使用されたと考えています。寺院には鉄釜をつかった湯屋がありました。資財帳には多くの釜が記され、温室の記載もあります。しかし、現存最古の湯屋建築である東大寺大湯屋でさえ、延応元年(1239)建立、応永15年(1408)大改造の建物であり、古代の湯屋建築は残っていません。最近になって京都府向日市宝菩提院廃寺で平安時代前期の湯屋遺構が発見されるなど、発掘による湯屋の発見例も増えてきました。今回の展示では、国立歴史民俗博物館に所蔵される永正18年(1521)「上醍醐西谷湯屋指図」とそこから復原される湯屋の模型を展示し、湯屋の構造と鉄釜の使われ方を見ておきたいと考えました。

お風呂好きと言われる日本人のルーツを、古代湯屋と湯釜から探ってみたいと思います。また、特別講演会を下記日程にて開催しますので、あわせてご来聴いただければ幸いです。皆様のご来館をお待ちいたしております。

(飛鳥資料館 西山和宏)

<特別講演会>

●5月8日(土) 午後2時から 飛鳥資料館講堂
「日本古代の鉄鑄物鍋釜の生産」

京都橘女子大学教授 五十川伸矢